

捕らえようとして

新 茂 之

奨励者紹介〔あたらし・しげゆき〕

同志社大学副学長

同志社大学国際連携推進機構長

同志社大学文学部教授

〔研究テーマ〕経験論的哲学の諸相

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

（フィリピの信徒への手紙 3章 12—14 節）

はじめに

本日のチャペル・アワーは、逝去者追悼礼拝であります。逝去者追悼礼拝は、2005年に起こったJR福知山線の事故と福島県のバス事故の犠牲となった本学の学生のために捧げた追悼礼拝から始まっています。そのような来歴を持つ逝去者追悼礼拝では、この1年間に天に召された現役の学生と教職員、在学中に天に召された学生、在職中に天に召された教職員を覚えて、祈りを捧げます。

本日の逝去者追悼礼拝のためにわたくしに示されたのは、ただいま読んでいただきました「フィリピの信徒への手紙」3章 12 節から 14 節までのみことばであります。この手紙は、パウロがフィリピという街にいるキリスト教の信徒に宛てた書簡になります。まず、パウロは、こう述べています。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません」（3章 12 節）。パウロの働きがなければ、キリスト教がいまのように世界には広まらなかったでしょう。それくらいに、パウロの存在は、キリスト教のなかでは計りしれないくらいに大きく、それを無視することは、できません。そうであるのに、みぎの発言にあるように、パウロは、みずからを振りかえって、完全ではないと断言しています。なぜ、パウロは、自分のことをそのように卑下するのでしょうか。パウロの態度の背後には、いったい、なにがあるのでしょうか。

本日の逝去者追悼礼拝では、パウロのことばからわたくしがなにを受けとったのか、それをみなさんと共有して、パウロのことばに耳を傾けていきたいと考えています。そのために、この奨励では、まず、キリスト者としてのわたくしの思いを述べてみたいと思います。とくに、わたくしは、キリスト者としては、まだまだ信仰の途上にあるのを告白しなければなりません。そのうえで、なぜ、堅固な信仰を持っているはずのパウロが完全な者ではないと言いきるのか、その背景を問いながら、そこに、パウロの、どのような信仰があるのか、それを探ります。それを踏まえて、基本的信頼という概念を鍵にしながら、人間の根本的なありか

たを明らかにして、コロナ禍という困難と苦難のなかにいるわたくしたちの生きかたをパウロとともに確認しましょう。

Ⅰ 欠けのある信仰

周知のように、パウロの書いた手紙は、福音書と並んで新約聖書を形づくっています。この事実にあつまでもなく、パウロのあり方は、いまを生きるわたくしたちキリスト者にとって、模範とすべき信仰に満ちています。パウロは、「フィリピの信徒への手紙」のなかで、「わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、」（１章 13 節）とはっきりと述べているように、この手紙を書いているときには、獄中にあります。それにもかかわらず、パウロは、大胆に神のみことばを宣べつたえています。それだけではありません。パウロは、ひとびとがさまざまな形でキリスト・イエスのことに言及しているのを知って、獄中にありながら、それを喜んでさえいます。パウロのことばを引けば、「わたしはそれを喜んでいます。これからも喜びます」（１章 18 節）。このように、キリスト・イエスにたいする、パウロの信仰は、みずからのいのちがいつ危険に曝されるのか、それが分からないような状態にあるときでさえ、まったく揺るぎなく、確かな信頼と希望のなかにあります。

パウロの、そのような強固な信仰と比べたときに、わたくしの信仰は、どうでしょうか。なるほど、わたくしも、キリスト・イエスを唯一の救主として、キリスト教の信仰を告白いたしました。わたくしは、同じ教会に所属する諸兄姉とともに祈り、可能なかぎり日曜日の礼拝を捧げてはいます。とはいえ、その一方で、わたくしは、世俗的なしながらみから完全に自由になっているわけではありません。わたくしは、キリスト者として、その歩みをはじめてから、むしろ、そうであるからこそ、正直なところを言えば、いまなお迷いのなかにあります。不安がわたくしのところを占めるときもあります。キリスト・イエスは、わたくしたちに赦しを求められています。キリスト・イエスは、弟子たちに祈りかたを教えられました。「マタイによる福音書」の記者は、その一部をつぎのように伝えています。「わたしたちの負い目を赦してください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／赦しましたように」（６章 12 節）、と。キリスト・イエスの十字架は、わたくしたちの罪の赦しを象徴しています。キリスト・イエスは、わたくしたちのあらゆる負債を十字架上の死を通して贖われました。そうであるから、わたくしたちは、キリスト者として、ほかのひとが犯した罪を赦さなければなりません。それにもかかわらず、教会で礼拝を捧げ神のみことばに接しているのに、ひとを赦すことのできないわたくしがつねに姿を現してきます。わたくしは、ほんとうに、キリスト者であるのでしょうか。

とりわけ、わたくしは、わたくしにとって掛けがえのないひとがわたくしのまえからいなくなるのをたいへん怖れています。というのも、キリスト・イエスである神は、愛の神であると同時に裁きの神でもあるからです。「マタイによる福音書」は、キリスト・イエスのことばをつぎのように記述しています。「天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」（13 章 49—50 節）、と。このように、たとえキリスト教の信仰を持っていたとしても、それが不当に歪んでいれば、神は、そのような者を信仰のない者として断罪され、その不信仰をその者に償わせようとします。その意味で、そのような不信仰者は、キリスト・イエスにあっては、罪人にほかなりません。罪人は、みずからの罪が露わになってしまえば、神の裁きからは逃れられず、いくら後悔してもすでに遅く、悔しさのあまり、罪人は、涙を流さざるをえません。確かに、キリスト・イエ

スは、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（5章 44 節）とおっしゃっています。キリスト・イエスは、わたくしたちに愛の重要性を説かれています。その一方で、それと同時に、キリスト・イエスは、裁きの試練をも与えられます。みずからの信仰に自信を持たないわたくしは、祈りのときには、こころの奥底で、わたくしにとって大切なひとをわたくしから奪わず、わたくしを試練から遠ざけてほしい、と願いつづけています。

ことによると、本日の逝去者追悼礼拝でこのような思いを述べるのは、不謹慎の謗りを免れないかもしれません。あるいは、わたくしは、あまりにも自分勝手な意見を申しあげているのかもしれません。とはいえ、それは、わたくしの偽りのない気持ちであります。むしろ、そうであるからこそ、愛する者を天に送られ地上の歩みをこれまで続けてこられたかたがたの心中を思うとき、わたくしには、察してあまりがあるのであります。

2 信仰の土台

このように、わたくしもキリスト・イエスとともに生きようとしてはいますが、実際には、欠けの多い信仰しかわたくしの手もとにはありません。とはいえ、さきに引きましたように、パウロは、こう語りかけます。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません」（フィリピの信徒への手紙3章 12 節）。完璧な信仰を手に入れていると思われるパウロですら、みずからを完全な者とはみなしていません。なるほど、日本的な価値観で語れば、パウロの発言は、パウロの謙虚さを示しているのかもしれません。とはいっても、他方で、パウロは、ひとのまえて恥じることなく福音を語り、積極的に多くのひとびとをキリスト教に導いてきました。パウロは、「わたしは福音を恥としない」（ローマの信徒への手紙1章 16 節）と確言しています。これは、伝道者としてのパウロの強い自信を示しているのではないのでしょうか。

みずからの信仰に確信がなければ、どのようなキリスト者も、ほかのひとびとに福音を伝えられはしません。その証拠に、わたくしの家族のなかでわたくしだけがいまだにひとりで教会に通っています。みずからの信仰を確実にできないわたくしは、キリスト・イエスの愛を知っているにもかかわらず、人間的な思いを先行させてしまって、近くにいる家族にすら、それを伝えられないのであります。キリスト・イエスは、こうおっしゃっています。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコによる福音書 16 章 15 節）。キリスト・イエスの教えを広めるという伝道は、キリスト者の使命であります。毎日曜日の礼拝を捧げるのに精一杯になってしまっているわたくしは、つぎの事実を認めなければなりません。キリスト教の伝道にどのような貢献も寄与もできていない、と。このようなわたくしのありかたは、明らかに、みずからの信仰の基礎が固まっていないことの証左ではないのでしょうか。パウロは、これとは対極の位置にしっかりと立っています。

これまで見てきましたように、パウロは、自身のキリスト教的信仰を確固とした形で保持しています。それにもかかわらず、パウロは、そのように育んできたキリスト教的信仰の不完全さを強調しています。すると、パウロは、みずからの信仰について、あるところでは確信を語り、別のところでは不十分さに言及していることになります。不十分さのもとでは、どのような主張であろうと、それを公言できないはずであります。それは、根拠のない自信を語るに等しいでしょう。なぜ、パウロは、そのように矛盾した言いかたをしている

のでしょうか。その点では、わたくしの信仰にも不可解なところがあります。わたくしは、キリスト者であるにもかかわらず、キリスト教的信仰に迷いと不安と怖れを抱えています。わたくしは、キリスト・イエスのみことばに耳を傾け、パウロの励ましを受けていながら、人間的な思念から自由にはなっていません。そうであるのに、わたくしは、日曜日に教会に行こうとしています。なぜでしょうか。

こうした問いにたいして、パウロは、すでに答えを与えています。パウロは、こう述べています。「自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです」（フィリピの信徒への手紙3章 12 節）、と。周知のように、パウロは、キリスト・イエスに出会うまでは、厳格にユダヤ教を信奉していました。パウロは、みずからを顧みて、こう記しています。「熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」（同3章6節）。パウロは、ユダヤ教の教えと戒めを厳しく墨守して、そのような立ち位置からキリスト者を敵視し、キリスト者を攻撃していました。パウロの証言では、パウロは、ユダヤ教のがわからずれば、非の打ちどころのないユダヤ教の信徒でした。しかしながら、キリスト・イエスとの邂逅は、パウロの、そのような態度を、まったく反対の方向に完全に変えてしまいました。パウロのことばを借りて言えば、「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです」（同3章7節）。パウロは、ユダヤ人としてユダヤ教の信仰を全うするために積みあげてきた実績を、キリスト・イエスにたいする信仰のために残さず捨ててしまいました。しかし、そのような転回をパウロに可能にしたのは、パウロ自身の意志でも努力でもありません。パウロの証言が明らかにしているように、キリスト・イエスがパウロを捕らえたから、パウロは、ユダヤ教徒としての、それまでの歩みを放棄しました。確かに、ユダヤ教徒からキリスト教徒に転身したのは、ほかならないパウロであります。とはいえ、パウロの理解のしかたでは、その事実の主体は、パウロではなく、キリスト・イエスにあるのであります。

3 愛されてあること

すでに述べましたように、パウロがユダヤ教の信仰を放擲してキリスト教に向かう、という奇跡を起こしたのは、キリスト・イエスであります。この現実をそのまま受けとめれば、つぎのような表現がそれを如実に示しているように思われます。すなわち、「キリスト・イエスがパウロを捕らえた」、と。それにもかかわらず、パウロは、そのような能動態の言いまわしを採用していません。むしろ、パウロは、「自分がキリスト・イエスに捕らえられている」という受動態を用いています。なぜ、パウロは、主体を明示する、「キリスト・イエスが自分を捕らえた」という能動態を使わずに、「自分がキリスト・イエスに捕らえられている」という受け身の記述に依拠して、みずからの境地を説明しようとしているのでしょうか。

ここで、信仰という観点を脇に置き、信仰から離れて、普段の生活の場面を想定しながら、みなさんに、こう尋ねてみたいと思います。みなさんは、どのような状態のときに、安心を感じるでしょうか。たとえば、わたくしたちは、必要なときには、パソコンの画面を通じて、みずからの個人情報を送信しています。なぜ、そのようなことができるのでしょうか。送信さきが個人情報の漏洩にたいする対策をきちんと講じているからではないでしょうか。送信さきに信頼があるから、わたくしたちは、安心して個人情報を提供できます。わたくしたちの個人情報が守られているから、わたくしたちは、安心できます。逆に、個人情報の漏れてしまうような可能性があれば、わたくしたちは、不安を感じてしまいます。ここで注意したいのは、保護の主体は、あくまでも送信さきであり、わたくしたちは、保護の対象になっています。

このように、わたくしたちの安心は、わたくしたちが守られているという受け身の感覚から生まれます。これと同じように、だれかに支えられているとか、だれかに認められているとかといったような感覚も、わたくしたちのこころを安らかにしてくれます。どのような協力もほかのひとからは期待できなければ、頼みとするのは、自分の力だけであり、わたくしたちは、つねに気を張っていなければなりません。そのような状況のなかで、はたして、こころの安寧を確保できるでしょうか。だれかほかのひとに愛されているという実感は、わたくしたちのこころをほんわかと温かくしてくれるのではないのでしょうか。みなさんにはそのような経験が少なからずあると思います。わたくしにもありました。十数年まえでしょうか。わたくしは、あらゆることが重荷になってどこか遠いところに逃げだしてしまいたい気持ちに駆られていました。そのときにわたくしを勇気づけてくれたのは、わたくしのとなりですやすやすと眠る子どもの無邪気な寝顔でした。わたくしが子どもを養っていたつもりでしたけれども、子どもに養われていたのは、ほんとうのところ、わたくしのほうであったのです。そのおかげで、わたくしは、いまここに立って奨励を行えるのであります。

実は、だれかに受けいれられている、という感覚は、わたくしたちが世のなかで生きていくうえでなくてはならない感じかたであります。これがなければ、ほかのひとと係わって世のなかで生きていくのが難しくなります。わたくしたちは、社会的な生活を送るためには、家からそとに出なければなりません。もし、家のそとに出た途端、だれかに襲われることになっていれば、どうでしょうか。だれかに傷つけられはしまいか、そのような不安が生じれば、どうでしょうか。わたくしたちは、一步も外出できないでしょう。実際には、わたくしたちは、そのように神経質にはならず、大学に来ています。

一方で、コロナ禍のなかでは、家から出られないというのは、ある意味で、現実味を帯びています。なぜでしょうか。なぜなら、そとは、危険であるからであります。逆に言えば、世のなかにおいて安全である、という漠然とした安心感がわたくしたちにあるからこそ、わたくしたちは、家の玄関の扉を開けて、社会のなかで活動が続けられるのであります。そのような安心感を基本的信頼と呼べます。それゆえ、わたくしたちの社会的生活を根底で支えているのは、社会にたいする基本的信頼であります。基本的信頼の端緒は、意外に早く、人生の最初期に、わたくしたちの面倒を見てくれるひととのあいだで芽ばえます。すなわち、自分のことをケアしてくれるひととの関係のなかで幼いころに体験した、ケアされたという受け身の感覚は、わたくしたちの基本的信頼を醸成し、その後の人生のなかですっとわたくしたちを支えていきます。このような視点からすると、人間の根底的なありかたは、受けいれられてあること、支えられてあること、愛されてあること、つまり、受動的な様態にあるのであります。

4 うしろのものを忘れ、

まえのものに全身を向けつつ

これまで述べてきましたように、人間の土台は、主体的で積極的で活動的な姿にあるのではなく、むしろ、それを成り立たせているのは、だれかほかのひとに関係づけられてある、という人間の受動的な状態です。そうであるからこそ、パウロは、「自分がキリスト・イエスに捕らえられている」という受動態の表現で、キリスト者としてのありかたを端的に言いあらわしているのであります。わたくしも、不完全ではありますが、そうあります。キリスト・イエスに捕らえられているという安心感があるので、迷いと不安と疑いと怖れのなかにもありながらも、わたくしは、日曜日の礼拝を捧げようと、知らず知らずのうちに教

会に足を向けています。しかも、パウロは、「捕らえられた」という言いかたで、それを過去のできごととして語るのではなく、「捕らえられている」という形で、その状態が現在まで続いているのを強調しています。ケアされたという乳幼児期の体験が基本的信頼となってわたくしたちをずっと支えつづけるように、キリスト者にあっては、キリスト・イエスに捕らえられたという過去の体験は、キリスト・イエスにたいする基本的信頼を成形して、キリスト者としての信仰を、地上での歩みを終えるまで、しかも、そこに留まらずに、天に召されてからも導きつづけていきます。

パウロは、このようなしかたで、キリスト・イエスにたいしてはキリスト者が受け身になっている、という真実を確認したうえで、わたくしたちにこう語りかけます。「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」（フィリピの信徒への手紙3章13節―14節）。パウロに従えば、キリスト・イエスに捕らえられてあるという感覚を把持しているキリスト者が関与すべき業は、一つしかありません。それは、うしろを見ないでまえを向き、将来に賭けて、キリスト・イエスに導かれながら、パウロとともに走りつづけていくことであります。わたくし自身、どのようなときでも、つねに告白せざるをえないように、欠陥の多い信仰しかわたくしにはありません。ことによると、不信仰に繋がりもする思いがわたくしに沸きおこっているのかもしれません。しかしながら、パウロの誘いは、そのようにうしろを向いた姿勢と手を切るようにわたくしたちを促しています。キリスト・イエスに捕らえられているという感覚があるのであれば、それを頼りに、まえをめざして走りつづけるよりほかに、なにもわたくしたちにはありません。

さきに引いた、パウロのことばに従えば、わたくしたちがそうしなければならない理由は、こうです。神は、キリスト・イエスを通して、わたくしたちを天に召しあげ、ご自身の恵みをわたくしたちに授けようとされており、わたくしたちは、それを捕らえようとして、走りつづけるのであります。不完全であれば、なおのこと、うしろだけを見ていれば、そこにはどのような進展もありません。不備があるからこそ、パウロの信仰を捕らえようとして、顔を上げ、まえを見て、ともかくもつぎの一步を踏みださなければなりません。神は、そのような信仰に豊かな顧みをお与えになります。

わたくしたちは、大切なひとびとをさきに天に送り、この世で生きています。しかも、わたくしたちは、新型コロナウイルス感染症がもたらしている、たいへん困難な状況のなかにいます。わたくしたちは、終息の見とおしを持ってないまま、辛い生活を余儀なくされています。心身ともに大きな負担が掛かっています。疲れはててしまったひとたちも実際にいらっやいます。家から出られないひとと現実にはいらっやいます。

しかし、わたくしたちは、そうしたなかにあっても、このようになんとか毎日を過ごせています。わたくしたちは、この礼拝堂に集えています。これは、まだわたくしたちに基本的信頼が残っているという事実を証しているのではないのでしょうか。凄惨な事件に巻きこまれてしまい、それが原因となって、基本的信頼が粉々に砕けちってしまえば、わたくしたちは、ほかのひとびとも、世間も、社会も、世界も、神も、なにも信じられなくなります。逆に言えば、だれかに関係づけられ、だれかに愛され、だれかに支えられているという感覚が幸いにもまだ消えていないから、わたくしたちは、世のなかにあってひとと接して生活を送れます。この感覚は、たとえぼんやりとしていても、確かにわたくしたちに息づいています。だから、その感覚を大事にしながら、わたくしたちは、パウロが力説しているように、過去に囚われず、将来に視線を注いで、走ろうとしなければなりません。そうでなければ、わたくしたちからなにも生まれませんし、神がお与えになる恵みも

手に入りません。将来を捕らえようとして、手と手を取りあって、天に召される日まで走りつづけようではありませんか。

おわりに

本日の逝去者記念礼拝では、貴重なお時間を頂戴して、「フィリピの信徒への手紙」のなかでわたくしに示されたパウロのことばにともに耳を傾けていただきました。逆説的に言えば、パウロの信仰は、キリスト・イエスにたいして受け身でありつづけられる弱さの安心感が醸し出す強さを露わにしています。パウロは、キリスト・イエスに捕らえられているからこそ、大胆にキリスト・イエスの救いを語れるのであります。いまだに神を恐れおののいているわたくしは、そのような弱さの安心感に身を委ねられていないのでしょう。これまで強調してきましたように、不幸な事件があとを絶ちませんけれども、関係づけられてあること、支えられてあること、愛されてあることの温かさがしっかりとわたくしたちを支えています。確かに、それは、壊れやすく脆く、けって堅固ではありません。しかし、関係のなかにすでにあるという感覚は、わたくしたちの存在の根底にあり、基本的信頼を生み、確実にわたくしたちを守ってくれているのであります。

すべてを続けたもう天の父である神さま、本日は、逝去者追悼礼拝であなたのみことばを、この学び舎に集う兄弟姉妹とともに共有できましたこと、こころより感謝を申しあげます。この礼拝のために、お忙しいなか、準備してくださったかたがたのお働きを顧みてください。コロナ禍のなか、さきの見とおしが立たず、まだまだ予断の許さない状況が続いています。神さま、どうか、わたくしたちに、そのような状況にあっても、あなたを仰ぎみながらも、この地上でしっかりとまえを向くことができますように、わたくしたちに勇気と励ましを授けてください。関係づけられてあることの意味に思いたし、繋がりと結びつきを大切にできますように、わたくしたちを導いてください。さきに天に召された学生と教職員を覚えめす。神さま、ご遺族のかたがたにあなたの深い癒やしと顧みを豊かにお与えくださいますように切にお願いします。あらゆることに感謝して、この祈りを尊い主の御名を通して捧げます。アーメン。

2021年4月21日 今出川水曜チャペル・アワー「逝去者追悼礼拝奨励」記録